

未来



全労協・郵政産業労働者
ユニオン長崎中郵支部
機関紙「みらい」
NO. 4464
24年7月16日(火)
Tel・Fax 095-828-1953
文責 支部書記長

人類は人類の手による核兵器で滅び

おはようございます。

今日、七月十六日は人類が魔界の迷宮へと迷い込んだ歴史的な日だ。

一九四五(昭和二十)年七月十六日、アメリカの原爆作成のマンハッタン計画チームのトップである物理学者のオッペン

ン・ハイマーが「トリニテイ実験」として原子爆弾が成功し、戦争の兵器としてこの世のものとなった日だからだ。

原爆は天然ウランを核分裂させてできるプルトニウムが素である。

長い間人類は、太陽系で最も遠い惑星は、天王星(ウラノス)だったが、

一八四六年に海王星(ネプチューン)が発見され、さらに一九三〇年には冥王星(プルート)を発見し、こ

れからウラン化学物質をプルトニウムと名付ける。(冥王星は2006年に惑星から除外される)

科学者たちが宇宙の暗黒から呼び起こしたのは、まさに冥府の王、地獄の魔王であった。



原爆の実験場はアメリカのニューメキシコ州ロスアラモスだが、その実験場には、いまも三メートル大の石碑版が建ち、「トリニテイ実験地ここに世界初の核装置が一九四五年七月十六日にさく裂した」とある。



トリニテイとはオッペン・ハイマーが名付けたが、キリスト教でいう三位一体であり、父である神と子であるキリストと聖霊で一つの神が三つの姿となって表れたものといわれる。オッペン・ハイマーは原子爆弾を神だとしたのだろうか。

アメリカはその実験成功の日から二十一日後の八月六日、広島へ、さらにその三日後の九日に長崎へ、その原子爆弾を投下し、一瞬のうちに二〇数万人が神の名のもとに殺された。

マンハッタン計画は一九四三年九月十五日に始まり、科学者の二〇〇人が世界中から集められ、最盛時には七千人を超え

る人が作業をする大規模なチームであった。当時の戦争では、一九四五年七月十六日の原爆実験成功の直後の七月二四日から、連合国(米英露中)はドイツの都市・ポツダムに集まり、日本降伏の在り方などについて会談を開いている。そこポツダム宣言(日本は無条件降伏十三条)が七月二十六日に

このとき、戦争国の日本はどうしていたのだろうか。日本政府と軍部はこの通告を「黙殺」する。理由は宣言に国体(天皇)の維持の文言がなかったからで、戦争は続く。

その一つ、十条には、「われらは、日本民族を奴隷化しようとし、または国民として滅亡させようとする意図を持たない。日本国民は日本国民における民主主義的質の復活強化に対する一切の障害を除去すべきである。言論、宗教及び思

戦後、アメリカの大統領と面会したオッペン・ハイマーは「私の手は血に汚れた」と謝り、大統領は「泣き虫め」と激怒し、彼をその後、核開発の役から外し、二度と会わなかった。



今年春に映画、「オッペン・ハイマー」が上映されたが、日本では原爆で多くの死者が出て、今なお被爆者や二世、三世者らが苦しんでいる状況にあるが、映画では語られていない。

想の自由並びに基本的人権の尊重は確立されるであろう」とある。反対する理由はない。

ハイマーはのちに、「もし原子爆弾が新しい武器となり、戦いあい争う世界の国の武器庫に加わることになれば、やがて人類がロスアラモスとヒロシマの名を呪うときがくるであろう。世界の諸国民は一つにならなければなりません。さもなければ

いま世界には一万二千発の核兵器があり、ロシアやイスラエルの侵略戦争や中東危機では、いつこれが投下されてもおかしくない情勢にある。

戦争に反対し、反核・平和のたたかいはなににもまして大切であり、危機は終わらせるべきである。タイトルの言葉は原爆を作ったハイマー自身が言っており、人類への予言として間違いない。人類の生き残りに核廃絶しかない。
※、参考文献は
①大森実の「戦後秘史、天皇と原子爆弾」
②藤永茂著の「ロバート・オッペンハイマー」から。
写真は若き日のハイマー。

仲間と競争せず、弱い立場の人と共に団結して闘おう。

期間雇用社員の希望者全員に正社員化を。

ゆめを、均等待遇、なごみ差別。

ユニオンは労基法裁判に勝利するぞ！

